

にいかした

北から南から



孔林の楷

八木 三男

紀元前五世紀、孔子の死に際して、三年の喪に服した弟子たちがその墓所のまわりに全国から集めた美しい木々を植えて立ち去った。十哲のひとり子貢はさらに三年塚を守り、「楷」という木を植えたという。中国山東省曲阜の孔子廟の楷は今に受け継がれ、その紅葉は孔子廟をとりまく七十万坪の林＝孔林を美しく彩っている。

その孔林の楷の種子から足利市で育てられた数年ものの苗二株が今年四月うらうらとした春日に、わが研究所の事務局長片岡弘さんのご厚意でその友人、足利市の杉木浩さんによってわが庭にもたらされた。

歌人窪田章一郎の『素心臘梅』（一九七九年）所収の「閑谷学校」*と題する五首の最後に、「閑谷にそだつ曲阜の楷（たか）雙樹ひとつ色づく空にしげりて」とある。この歌には孔林からきた二本の楷という来歴が盛られている。その来歴の委細は、足利市の華雨蔵珍之館の栗山實氏の解説によると次のようである。

楷の種子を孔林から持ち帰り、育苗した東京林業試験場長白沢保美博士が、一九二二（大正一一）年にその苗を日本各地の孔子廟や儒学学校に配布した。そのうちで現存するのは、足利学校（栃木）*＊雌一株、湯島聖堂（東京）雄三株、多久聖廟（佐賀）雌一株、閑谷学校（岡山）雌二株である。博士は楷が雌雄異株であることから、かならず二株以上を一組にして贈ったという。

わたくしも訪ねたことがあるが、閑谷学校のそれは階段の傾斜地に他の木から離されて植えられたために、殊のほか見事に茂り、重厚な建物（国宝）とよく調和していた。毎年その美しい紅葉がテレビで紹介されるという。



もう少し栗山氏の解説に従うと、楷は二〇年以上経って花をつけるまでは、雌雄の区別がつかず、大正期に配られた楷は白沢博士の必ず二株以上一組という意図にもかかわらず、上記の各聖廟や儒学学校のようにあいにく雌雄がいっしょでなく、戦後楷の人工交配が成功するまで、日本で自然に殖えることはなかった。しかし、現在では、日本で育てられた曲阜の楷の子孫が各地の林業試験場や学校に贈られて育っているという。

わが庭にもたらされた楷は、足利市が山東省済南市と姉妹都市になった関係で、曲阜とも交流があり、曲阜の種子を直接足利で育苗したものである。孔子廟の直系の子孫である太さ二、三センチ、丈二メートルの文字通りの貴種は、他の庭木から離れた日当たりのよいわが庭の特等席に植えられた。「学問の木」「儒学の象徴」であるから、これを朝夕拝んでいけば、わたくしでも、もう少し「勉強ができる」ようになるかもしれない。

最後に、楷を植物図鑑によって紹介してお

こう。ウルシ科の落葉高木、二、三〇メートルに達す。秋季の紅葉が非常に美しい。和名トネリコバハゼノキ。中国原産。大きな羽状複葉をつける。イチヨウと同様に雌雄異株。中国では「楷書」の語源とされ、科挙の合格者に楷でつくった手板しや（笏のこと）を与えて名譽をたたえたという。

*岡山藩主池田光政が藩内民間子弟のために創建した郷学。一七世紀末の建物は現存最古の学校建築。

*鎌倉時代初期、足利に創設された学問所。室町時代には上杉憲実が再興。戦国時代に最も興隆。武士、僧侶の教育にあたり、主に儒書、のちに医書も講述。

（やぎ みつお・にいがた県民教育研究所所長）

